

「轆角庄」故事の構造

——中国雲南省大理地方の白族の炭焼長者譚——

工藤 茂

一九八五年一月下旬、私たちは中国雲南省大理を訪ねた。それは民俗採訪の調査旅行ではなく、北京の日本語研修センターの講師を嚆^{ほきょう}う招待旅行であった。だが、昆明から大理に向かう車中で聞いた王洪濤氏の話にいたく興味をそそられ、大理地方に住む白族の民俗や民間伝承に関心を持った。王洪濤氏は雲南省教育庁外事弁公室に勤める漢族の一人で白族ではなかったが、大理地方の白族の三月街の民俗について語ってくれた。それは旧暦三月十五日から数日間、大理に立つという盛大な市のことであった。同時にその市が白族の若い男女を結びつける場にもなっていたということ、それともう一つ、白族は数多くの歌を持っていて、その歌い手が多くいるということも語ってくれた。私はその話を聞きながら、あるいはそのような場面に遭遇し、そのような人々の歌を聴くことができるかもしれない、という期待を持ったのであったが、結局、大理滞在中はその機会がなく、その帰途、楚雄において他の少数民族の高校生による、その人々の歌を聴き、踊りを見たり、自らも踊ったりするという体験をしたのであった。

さて大理は、未だ一月の下旬だというのに、畑の菜の花が美しく咲き、にせあかしやが鮮やかな黄の花を着けていた。ここは人口三十八万人。そのうち少数民族である白族が二十四万人住んでいる。そう説

明してくれたのは、大理外事弁公室に勤める張碧濤氏であった。氏は白族の父と漢族の母の間に生まれた若いお嬢さんで、蛇骨塔にまつわる段赤城の伝説などを語ってくれた。それからまた、白族は唐代から漢族と交渉があり、文字は持たず、後に漢字をその族の文字として用いたことをも話してくれた。ただ残念ながら宗教にはあまり関心がなかったらしく、折角周城鎮まで案内してくれたのに、蝴蝶泉の伝説の主人公で、今では周城の本主として祀られている杜朝選の土人形までは紹介してくれなかった。もつともその時、私自身もそのことを知らなかったのだけれども。

それにしても大理は美しい所であった。中央に大きな耳の形をした洱海という湖が広がり、西に点蒼山の山脈が連なり、空も雲も水も綺麗な、桃源郷のような所であった。

現在の大理がそう呼ばれるようになったのは、十世紀のことだといふ。大理は大理石の名産地である。だから大理と呼ばれるようになったのかというところでなく、白族の段思平が政権を執って国号を大理と改めてからそう呼ばれるようになったと、雲南人民出版社発行の『大理風情録』に紹介されている。そこには、「理」と「治」とは同義で「大理」とは即ち「大治」の意味だと書かれている。

同書はまた、この地方のさまざまな年中行事を紹介している。たとえば王洪濤氏の語ってくれた三月街についても、次のように紹介して

いる。「街」というのは雲南方言で、「市」とか「墟」または「場」を意味する語である。夏曆三月十五日から二十日まで、点蒼山の下崇聖寺の近くに大きな市が立つ。そこには民族衣裳で盛装した老若男女が集い、物を買ひ、歌をうたい、踊りをおどる。白族ばかりではなく、彝族、納西族、蔵族、苗族なども雲のように集まり競馬を行う。相伝えるところによると、往古、観音が三月十五日に大理に到つて伝教をした。そこで毎年この時期に食べ物を供えて観音を拝し経を誦した。これが三月街の起源である。

白族は古くは遊牧生活を送っていた。それがやがて水稻栽培をするようになる。その結果、繞三靈、栽秧会、田家楽、火把節、嘗新節といった年中行事が行われるようになった。繞三靈は播種前の四月二十三日から二十五日に行われるその年の豊作を祈る春の遊び、栽秧会は田植祭り、田家楽は田植えが無事に終つたことを祝い水に感謝をささげる行事、火把節は六月二十五日の松明祭り、虫送りをする盛大な行事、そして嘗新節は辛い労働の終了を祝つて田公地母神を祀る収穫祭である。

その他にも白族は漁潭会、松桂会、石宝山歌会などの年中行事を持つていて、そこでは若い男女の歌垣が行われている。若い男女はお互いに歌唱のやりとりをなし、結婚の相手を見つめる。そうなると両親と媒妁人とが話合つて婚約成立となる。男の家では吉日を選び、女の家には酒と雄鶏を届ける。次に男は数ヶ月女の家に働きに出かけなければならぬ。時には女の家に住み込みで働く。このようにして男は女の家の年輩の人々を知り、その環境を知る。しかる後に女は男の家に迎へられ、盛大な結婚の宴が行われる。

ところで、これまで述べてきたことでも分かるように、白族は数多くの伝承歌謡を持つていて、それらはその内容と形式によつて、打歌、本子曲、串枝連、大本曲などに分類されている。それらを収めた一冊が、『白族民間叙事詩集』（楊亮才・李績緒選編）として中国民間文芸

出版社（北京）から出ている。

一方白族はまた、数多くの神話、伝説、昔話を持つていた。それらは『白族民間故事伝説集』（李星華記録整理）としてまとめられ、同じ出版社から出版されている。

右のうち後者は既に、君島久子氏の訳で『中国少数民族の昔話——白族民間故事伝説集』として三弥井書店から出版されているが、その中に「轆角庄」という故事があった。

楊美清編『大理風物散記』（昆明市群衆芸術館へ春城芸術編輯部編印）によると、「轆角庄」は白族の民間故事で、「望夫雲」「蝴蝶泉」と共に、白族民間三大愛情故事と称せられている、とある。後二者は愛に殉ずる悲劇的な故事であるが、「轆角庄」はまさにめでたしめでたしで終わる運命譚であり、致富譚である。その轆角庄という村は、同書によると現在の大理県七里橋公社、点蒼山聖応峰下にある白族の人家五六十戸の村落で、その北を青碧溪が流れているという。

昔、この庄で炭焼きをしていた張保君の貧しい家に、白王の娘白娃公主（王女）が水牛に乗つて訪れ、彼と結婚する。王女が母の薬を買うようにと張保君に渡した「金叶子」が契機になつて、彼が炭焼く山や溝にあるものも金銀と分かり、一家はたちまち金持ちになつて白娃は父王を招くことができた。

以上が「轆角庄」の故事のあらましである。一見してその内容は、柳田国男が豊前の宇佐八幡と関連する豊後のそれが伝播されたと考えた、我が国の炭焼長者譚に類似しながら、その細部に無視しがたい相違がある。そこで、その両者を比較検討してみたいと考える。

二

豊前宇佐八幡宮に祀られる八幡神に関して、科学的に研究されるようになったのは明治に入つてからのことだという。その諸説と変遷に

ついで、中野幡能氏は次のようにまとめている。

これをまとめると明治には三説が現れ、ヒコホデミ等とされ、これが否定され地名説を残し、仏教的神で僧侶が利用したとされ、大正昭和には仏教的神、母子神、鍛冶神、秦の氏神、神武天皇、海の神という説が現れ、戦後は仏教の融合に豊国法師が指摘、宗像神、鍛冶神、ハルマン信仰から邪馬台ヒミコの信仰まで現れた。

それに対して著者(中野氏)は神と氏族の関係を明らかにし、宇佐辛島大神の三氏族の関係をとりあげ、さらに宮地説以来の地名起源説を發展させた。この見方はその後諸氏の研究に影響を与え、戦後の研究の主流になったが、母子神鍛冶神の問題も引きつづき行われてきている。

そして、大正十四年に発表された柳田国男の「炭焼小五郎が事」(『海南小記』)については、「炭焼小五郎の伝説は八幡神最古の神話である」としてはじめて八幡神を鍛冶神とみる見方を発表したものであった、と述べている。

中野氏の指摘のように、柳田国男の「炭焼小五郎が事」の特色は、大分県大野郡三重町の蓮城寺と臼杵市深田の満月寺の縁起に関わる真野長者の物語を「宇佐の根源が男性の日の神であり、其最初の王子神が、賀茂大神同系の別雷であり、次の代の若宮が火の御子であり炭の神であつて、所謂鍛冶の翁は其神徳の顕露であつた」という神話の残存と見なしたところにあつた。つまり、大神の比義が最初の巫女で、比義によつて神が顕われたとするならば、それと近い神話が、玉世姫の力によつて貴き炭焼小五郎が顕われた物語として語られていたのが、炭焼小五郎の物語ではなかつたか、とするのである。したがつて豊後の炭焼長者譚が本邦では最も古く、それが鑄物師の手によつて各地に運ばれて行く。その過程において炭をイモジと謂う宇佐郡などの方言が語り手に作用して、芋掘り長者譚が派生したと考えたのであつた。その炭焼長者の話というのは、柳田国男の要約によると、

第一には極めて貧賤なる若者が、山中で一人炭を焼いて居た。豊後に於ては男の名を小五郎と謂ふ。

第二には都から貴族の娘が、兼て信仰する観世音の御告げに由つて、遙々と押掛け嫁にやつて来る。姫の名がもし伝はつて居れば、玉世か玉屋か必ず玉の字が附いて居る。

第三にはその炭焼小五郎は花嫁から、小判又は砂金を貰つて、市へ買物に行く途すがら、水鳥を見つけてそれに黄金を投げ付け

る。

第四の点は即ち愉快なる発見である。何故に大切な黄金を投げ棄てたかと姫に戒められると、あれが其様な宝であるのか、あんな小石が宝になれば／わしが炭焼く谷々に／およそ小策で山ほど御座る／と謂つて、それを拾つて来てすぐにすると長者になつてしまふ。

となる。

この話はさらに採集されて、現在は『日本昔話大成』(角川書店)の「本格昔話」の五、「運命と致富」の項に分類されている。そこには初婚型と再婚型に分けて載せてあるが、同じ項に載っている芋掘り長者の昔話も再婚型と同じ構造を持っている。したがつてこれらの長者譚は、ほぼ同じ系列のものと考えられる。だが細かい相違点を挙げると、先に引用した柳田国男の要約は、初婚型に属するものであつた。

ところで、伊藤清司氏の「炭焼長者型説話の構造」によると、炭焼長者・初婚型、再婚型および芋掘り長者の昔話は、日本ばかりではなく中国や朝鮮半島にも伝承されていたのである。氏はそこで中国の十五話、朝鮮半島の六話を日本のそれと比較検討した結果、次のような仮説を想定している。すなわち、

アジアの「炭焼長者型」説話は、おそらく「運命譚」の類の共通の伝承が△初婚型▽と△再婚型▽の二型に展開し、伝承と伝播の過程で、さらにさまざまな發展を遂げ、たとえば、一部の地方

で、夫の稼業を芋掘りとするものに変じ、それがのち、朝鮮半島と日本列島でそれぞれさらに独自の発展を示した。あるいはまた娘を勤当した父親に富裕になった娘夫婦が孝養をいたす結果の話が生じ、それが中国と朝鮮でそれぞれ独自に展開し、とくに後者では好んで語られて普及し、朝鮮の特徴となった。他方、日本では幸福な結婚への案内に神が介在し、それに反比例して、父親の影が薄弱化するという特色を示している、(略)。

以上は結論であるが、具体的には氏は八初婚型VのそれをA、B、Cの三つのタイプに分類している。そして、白族の「轆角庄」の故事を、これらのうちのBタイプに分類している。Bタイプとは、高官ないし大金持に三人の娘がいる。

その末娘のみが父の意見に沿わない。

末娘が勤当同然の身となり、乞食あるいは柴刈りなどの妻になる。

この夫婦が黄金を発見し、大金持になる。

富裕となった娘が勤当した父親に孝養を尽すことで結末となる。

という構造を持った説話のことである。右の最後の一行を「娘を勤当した父はそれを恥じて死ぬ。または零落する。」という一行に変えれば、これはたちまちAタイプの説話になる。Cタイプのそれは、先に引用した柳田国男の要約した炭焼長者の話の型である。もっとも夫の職業を炭焼きとするのは中国には少なく十五話中二例、朝鮮六話中三例だといふ。その少ない二例のうちの一例が「轆角庄」の故事であった。

三

「轆角庄」故事は中国雲南省大理の洱源で採録された話である。語り手は瑞青と楊亮才。故李星華氏が記録整理した『白族民間故事伝説集』に収められていることは、一章において既に述べたとおりである。

この故事では主人公は白娃王女、つまり女性である。ところが日本の炭焼長者譚の場合には豊後のそのように小五郎、つまり男性が主人公になっている場合と、喜界島のそのように女性が主人公になっている場合とがあつて一定しない。朝鮮のそれは女性が主人公のようである。その点では「轆角庄」故事に非常に類似した話となっている。その語り出しの部分を用ひしてみよう。

白王有兩個姑娘一個兒子、白鶴公主、白娃公主和白林太子。有

一天、白王問他的大姑娘白鶴公主說、

“白鶴、你吃哪個的福祿？”

大女兒說、

“我吃父王的福祿！”

白王又問他的兒子白林太子說、

“白林、你吃哪個的福祿？”

兒子也說、

“我吃父王的福祿！”

白王听了、心里很高興。他又笑迷迷地問小女兒白娃公主說、

“白娃、你吃哪個的福祿？”

白娃公主脫口就說、

“我誰的福祿也不吃、吃自家的福祿！”

白王一听、心里很生氣、就說、

“吃你自己的福祿很好、你就吃你自己的福祿去吧！”

白王とは白族の王のことであろう。その王には二人の王女と一人の王子があつた。末の王女は名を白娃と言ひ、これがこの話の主人公である。日本の場合にはこれを、殿様の、京のさる大臣の、長者の、大内大納言の、鴻の池の、出雲大社の、あるいは京都の天子様の操の姫などとする。佐渡では三人娘のうちの姉娘とするが、いずれにしろこの主人公は、高貴の出でさえあれば、語る場所民族の相違によつて変化し得る可能性を持っていたと言へる。もっとも、二章において述べた

柳田説は、この姫の名に玉（たま）が付く必要があつたのだけれども、さて、この主人公白娃王女は、父の問いに姉や兄と違つて答えをしたためにその怒りをかい、自分で自分の運を開けとばかりに追い出される。そこで王女は父に一頭の水牛をねだり、その背に乗って行くことにする。

白娃公主跟他的父亲要了一頭大水牛、他爬上了牛背、輕輕地拍着牛背說、

『水牛、水牛、你把我馱到哪里、我就落到哪里！』

白娃公主倒騎在水牛的背上、讓牠隨意地馱着走。

青森県三戸郡の炭焼長者・再婚型の話に、亭主に離縁された嫁が、亭主の呉れた牛に乗って行き、山中で神のお告げを受け、そのお告げどおり牛の行くところに行つて黄金を発見し、長者になつたという話がある。例は少ないけれども、この例はたいそう興味深い。というのは、白娃王女が父から貰つた水牛に乗って水牛の行くところに行き、そこで後に本主と祀られる焼炭郎の張保君に会つて金持になるという話と、その牛のモチーフが同じだからである。どうして同じなのかは不明であるが、これには重要な意味が含まれていた。『日本昔話事典』（昭和52・弘文堂）の「炭焼き長者」の項で、宮崎一枝氏はそのことを以下のように述べている。

昔炭焼きの技術は冶金師が持つていたとされ、「炭焼き長者」譚はタタラ師、鍛冶師らと関係があると思われる。冶金技術は中国や朝鮮から入つて来たが、両国と日本のこの型の話には共通点が多い。（略）たとえば白族の話でも、牛が王女を炭焼きの家に導く条や雀を金で打つ条がある。牛は小アジアの鉄と関係のある天候神の乗り物であり、北方アジアでは鍛冶屋の神の持ち物とする民族もある。

右に「たとえば白族の話でも」とあるのは、おそらく今問題にしてゐる「轆角庄」故事のことであろう。その主人公が水牛に乗って行き、

その水牛の案内によつて張保君にめぐりあうのには、それだけの理由と意味があつたのである。このことについては後に詳しく述べる予定なので、次の特色に触れておこう。それはここで語られる地名起源についてである。

来到了一个小村庄。水牛就在小村庄中間撒了一泡尿、以后人們就跟这个村庄叫歇登。（略）

来到另一个地方。忽然牠滾臥在一塊濕漉漉的泥灘里。后来、当地人就叫这个地方為契保。（略）

走到了一个地方、牠不自主地弯了弯腰。人們以后就叫这个地方為墨等柯。（略）

走到一个地方、大水牛用犄角撞了一下土牆、把牆上的撞得嘩嘩地落了一地、人們后来就跟这个地方叫倒處。（略）

又来到了一个地方、公主騎在牛背上已經騎得又飢又乏了。那里的人們、看見公主累得那个样兒、心里着实有些可憐。于是他們就端来熱氣騰騰的白米飯讓公主吃。公主飽飽地吃了一頓。事后、人們就叫这个地方為波嚙作。

以上の他に轆角庄の地名を入れて、ここでは六つの地名起源が述べられている。そのうち右に挙げた五つの地名については、さらに編者の注がついている。それを君島久子氏の訳で紹介しておこう。

歇登（シエトン）——白語（白族語）で「くさい」という意味。現在もこの村は歇登と呼ばれる。

契保（チーパオ）——白語で「半身をぬらす」という意味。今もこの村は契保と呼ばれている。

墨等柯（モトンカ）——白語で「牛がうすくまる」という意味。今でもこの村はある。

倒處（タオチュ）——白語で「牛が角でドンとつく」という意味。今なおこの村はある。

波嚙作（ポモツオ）——白語で「白米の村」という意味。現在も

この村はある。

さて、波囀作で湯気の出る白米の御飯を腹一杯食べた王女を乗せて、水牛は元来た道に戻って行く。そして契保の、ある狭い路地へ入っていった。水牛の角は長く、その路地はあまりにも狭かったので、水牛は頭を水車のようにぐるぐる回して、やっと路地に入ることができた。この路地が轆角庄であり、張保君とその母親の住む家のあるところであった。轆角庄の轆角とは角が水車のようにまわるといふ意味である。このようにして水牛と王女の行く途中、水牛の行為と王女の行為に由来する地名が生まれていく例は、日本の炭焼長者譚には無い。ところがこれらの村落は、後に焼炭郎の張保君と信仰上重要な意味を持つことになる。が、その前にもう少し王女の後を追ってみよう。

白娃王女は炭焼きの張保君と盲目の母親とに無理矢理頼みこんで、張保君の嫁になった。その話を聞いた白王は腹を立て、娘と縁を切ることにしていた。そこに娘が夫と現れて王を招待した。王は怒って、銀を敷きつめた道を造り、金の橋をかけたならば招待に応じようと言う。今度は王女がすっかり腹を立てて、何も言わずに帰ってきた。張保君は毎日山奥に出かけて炭を焼いていた。しかし一家の生活は一向に楽にならなかった。白娃王女は家族の空腹を見かねて、ある日自分の持つて来た三錠の銀子を夫に渡し、街へ行って米を買ってくるように言った。

張保君はこの三錠の銀子を、一つはこじきを襲った大きな赤犬を追っばらうために使い、もう一つは実った稲穂に群がる田のすずめを追いはらうために使い、三つめは畑のとうもろこしを盗み食いしている馬を追いはらうために使ってしまう。

日本の炭焼長者譚では、多くは水鳥をねらって黄金を投げることになっているが、ここでは以上の三つのことに使ってしまうことになっている。もっともその一つにすずめが含まれてはいるけれども、だが、すずめは水鳥ではない。ここに日本の炭焼長者譚との相違が見られる。

もう一つ、この時点ではまだ、山中における黄金発見が語られないことも、日本のそれとは違っているところである。それが語られるのは、張保君の母親が病気になった場面においてであった。

有一天、張保君の母亲病倒了。没钱买药治病，公主只得把自己最后的一个金叶子拿出来送给男人，叫他拿到街子上卖掉，给母亲买药吃。张保君把金叶子接到手里一看，说、

“这有什么稀奇，我天天烧炭的那个山沟里满沟都是这样黄闪闪沉甸甸的东西！”

このようにして、一家はたちまち金持になる。白娃王女はふと父王の言葉を思い出し、銀の道を造り、金の橋をかけて父王を招待した。父王はしきりに娘をほめ「白娃女兒真有福氣、这都是我女兒白娃的福氣！」と言ったという。

このような結末も、日本の炭焼長者譚にはないところであろう。ただ、沖永良部島の、あーがりという貧しい漁夫のところに、りっぱな娘が嫁に来たという話の中に、金の柱金の門の家を建てて両親を招いたが、結局両親は来なかったという例が一例あった。しかし今のところ、この話と白娃王女の話との関連は不明である。

四

故李星華女史によって採録整理された「轆角庄」のあらましは、以上のとおりである。焼炭郎張保君がその後どうなったかは、ここでは語られてはいなかった。ところがこれには注があつて、次のように述べられていた。

即故事中的主要人物之一。為云南洱源歌登、契保、墨等柯、倒處、波囀作等村的本主(即滇西白族人民家家供奉的神)。云南洱源

附近一带家家戶戶講述着白娃公主与燒炭郎張保君的动人故事。

右の注によると張保君は、水牛と王女の行為が起源になって名づけ

られた村々の本主として祀られたことになっている。

毛星氏は「关于白族的几点情况」において、白族の宗教信仰として本主、祖先、巫、儒教、仏教、道教の信仰を挙げてゐる。そして、本主の信仰については、「これは祖先崇拜と関係のある一種の英雄崇拜で、白族特有の信仰である。ほとんどの村にも、村人のために特別な手柄をたてた英雄についての伝説があり、このような英雄が皆の承認を得てその村の本主として崇められ、村中の人がみな、自分を本主の子孫であると思つてゐる。どの本主にも本主廟があり、中には本主の木像が塑像が安置されてゐる。」(君島久子氏訳、以下同)と紹介してゐる。これについては故李星華女史もその「解説」において、次のように述べてゐる。

白族にはまた、本主神の崇拜という特殊な宗教信仰がある。これは、原始的な自然神崇拜が部族首領崇拜にまで発展した宗教である。白族人民が本主に奉る条件と考へてゐるのは、一般的に模範的人物または人々のために功を立てた英雄的人物にほかならないが、この他に龍や耕作用の牛を本主神として奉ることもある。例えば、大蛇を殺した英雄の段赤城は羊皮村の本主として奉られ、蛇を斬つた英雄杜朝選は周城の本主に、小黃龍は悪龍にうち勝つてその地方の害を除いたので、本人が緑桃村の本主として崇められてゐるほか、彼の母も龍母として人々から奉られてゐる。これらの英雄は人々のために害を除き、勲功著しいために、その地の本主として尊敬された。この他に模範となる英雄人物、例えば、洱暴力に對抗した女性英雄柏節夫人は大理北門外の本主となり、洱源の白米庄の炭焼き張保君は人柄が善良で働き者で情が厚いことから、人々の手本とされ、白米庄の人々の本主となつてゐる。白族の本主信仰がどのようなものは、以上の解説でおおよそ理解できよう。だが張保君の場合は、どうも本主として祀られた理由が他の場合に較べて弱いように思われる。その点をも考慮に入れながら、

この故事を検討してみよう。

轆角庄の物語の特色は、主人公が白娃王女という女性であつたところに、その一つがある。白娃とは白王の娘で小さい子、または小さい方の娘の意であろうか。その王女が水牛に案内をまかせて自分の福祿を求め、ここで注目しなければならぬのは、牛(水牛)を鉄と関係のある天候神の乗り物であるとする地方や、鍛冶屋の神の持ち物とする民族があるということである。炭が日常生活に使われるようになったのは、わが国でもあまり遠くない昔のことであつて、それ以前は鍛冶・鑄物用として使われていたと言われる。白族の場合はどうであつたか、詳しいことは分からない。しかし、周城鎮の楊銓氏のお宅では食事用の燃料には薪を燃やしてゐたし、一月でも炭火で暖を取らなければならぬほど寒くはない常春の大理のことであるから、それらのことに炭を使つてゐたとは考えられない。したがつて張保君の焼く炭には、その他の用途があつたはずである。しかもこの地方は、かつて金の産地でもあつた。と、こう考へてくると、柳田国男が考へてゐた炭焼小五郎の正体と、焼炭郎張保君のそれが奇妙に重なつて見えてくる。つまり、張保君は白娃によつて顕現した神である。その白娃は水牛に自分の運命をまかせてゐた。牛の役割については既に述べたとおり、鍛冶、鉄に密接に関わつてゐる。その牛が歩みを止めたのが張保君の家の門口であつた。

李女史の解説に「張保君は人柄が善良で働き者で情が厚いことから人々の手本とされ」、その結果白米庄の人々の本主に祀られたとあつた。確かに伝承されてゐる「轆角庄」故事の、白娃王女に手渡された三錠の銀子の使い方にも、そのような人柄は現われてゐた。張保君は炭を焼き、柴を刈つて生活してゐたのだから、すずめの群れを追つた田や馬を追いはつたとうもろこし畑は、彼のものではなかつたと考へられる。つまり彼は、三錠の銀子を自分の空腹を満たすためにではなく、他人を救うためにことごとく使い果たしたのであつた。その点

では全く李女史の解説のとおりであろう。

ところが白娃の名に潜む小さな子、水牛に潜む天候神あるいは鍛冶神、地名起源と本主信仰の意味するもの等を張保君の炭焼きと結びつけてこの故事全体を見直す時、そこには全く別の張保君のキャラクターが浮かび上がってくる。それは火の神、あるいは鍛冶神としての彼のキャラクターである。それが白娃によってこの世に顕現することを物語ったのが、この「轆角庄」の故事ではなかったか。とすればこの故事は、日本の炭焼長者譚との間に相当の異同を持ちながら、しかし柳田国男の仮説の中心においては、全く同じものであったと言えることができるのである。

注

- (1) このことについてはすでに、『焰』第2号（一九八六年二月発行・福田正夫詩の会）に「大理にて——洱海賓館の夜——」として発表しているので、ここでは省略する。
- (2) 君島久子氏の訳では、「王女と炭焼き」となっている。
- (3) 中野幡能『宇佐宮』（昭和六十年十月十日発行・吉川弘文館）の五頁。
- (4) 『海南小記』（昭和三十一年六月十日・角川文庫）の「炭焼小五郎が事」の二（一四七頁—一四八頁）の当該部分から、必要な部分を抜粋した。
- (5) 『口承文藝研究』第六号（昭和五十八年五月三十日・日本口承文藝学会）所収の論文。
- (6) 伊藤氏の右の論文より引用した。
- (7) 伊藤氏の（5）の論文による。
- (8) 関敬吾『日本昔話大成』3（昭和五十三年五月三十一日・角川書店）の一六二頁。
- (9) 参考までに君島久子氏の訳を掲げておく。
張保君（チャンバオチュン）——この物語の主人公の一人。雲南洱源の歌登、契保、墨等柯、倒處、波曝作等の村の本主（即ち、滇西白族が家々に祭

っている神）である。洱源附近では誰もが、白娃王女と炭焼き張保君の感動的な物語を語り伝えている。

(10) 李星華記録整理『白族民間故事伝説集』（一九八二年四月・北京・中国民間文芸出版社）所収のもの。

(11) (10)と同書の「解説」。